

母への恋文（仮題）

あなたがいなくなつて、もう五十年が過ぎたなんて、信じられない。私はいつも、あなたを追いかけてきた気がする。いつでも、心はあなたにとどまっていた。

私は父と同じ教師の道を歩んだ。生徒達と一緒にボランティアを始めて二十年になろうとしている。毎月募金で街に立つ。ここ数年は、震災遺児支援に絞り、かんかん照りの日も厳寒の日も立ち続けた。またホームレス支援の炊き出しにも毎月生徒と参加した。死ぬということと生きるということにこだわる私の心は、ずっとあなたに向かっていた。その私たちの活動の鉄則は、笑顔と感謝の大きな声である。笑顔が人を笑顔にさせる。それは生前のあなたに教わったことだ。

最近久しぶりに会った友人との酒席で話しながら気づいたことがあった。

「おれは六つの時に、農薬の事故で、母親が苦痛でゆがんだ顔をしながら死ぬのを、目の前で見ていた。でも、息を引き取った後の顔は、いつもの笑みが口元に戻り、弾んだ声がそこから出

てきそうだった。あの時から、自分の中で時間が止まったまままでいる気がする。それに気づくのに、おれには五十年間の心の歩みが必要だった。」

そう話し、思わず目からこぼれたしずくを友人は不思議そうに眺めていた。

孤独な人のいのちに自然と目がゆき、寄り添うことが自分の活動になっていった。心の渇きがそうさせた。あなたが導いてそうさせた。

私はあなたの笑顔が大好きだった。五十年経ても、それが私の心の中で息づいている。同時に、人生の苦境の途上で、何度あなたを恨みあたりちらしたことか。なぜ私たちを捨てて先に逝ったのかと。でも、目を閉じるといつも笑顔のあなたに会えた。あなたはいつも守ってくれた。私は、天国に宝を積んでゆきたい。あなたの……あなたの笑顔に会いたくて。

あなたがいなくなつて、もう五十年が過ぎたなんて、信じられない。私はいつも、あなたを追いかけてきた気がする。いつでも、心はあなたにとどまっていた。

私は父と同じ教師の道を歩んだ。生徒達と一緒にボランティアを続けて二十年になろうとしている。毎月のように街に立つ。ここ三年ほどは、震災遺児支援に絞り、かんかん照りの日も厳寒の日も立ち続けた。〔※その私たちの活動の鉄則は、笑顔と感謝の大きな声〕またホームレス支援の炊き出しにも生徒を連れて参加してきた。個人での夜回り活動は、二十歳の頃から続けている。死ぬということと生きるということにこだわる私の心は、ずっとあなたに向かつていた。※〔それでも笑顔が人を笑顔にさせる。〕〔それは生前のあなたに教わったこと。〕

最近〔久しぶりに〕会つた友人と二人の酒席で〔話しながら〕気づいたこと〔があつた〕。友人の苦しい胸の内を聞いて、私も小さい頃からの自分を振り返り〔り〕、フツ〔ふつ〕と思ひの〔が〕出たことば。

「おれは木歳〔六つ〕の時に、農薬の事故で母親が苦痛でゆがんだ顔をしながら死ぬのを目の前で見ていた。〔でも〕息を引き取つた後の顔は、いつもの笑顔〔み〕が口元に戻り、弾んだ声がそこから出てきそうだった。その〔あの〕時から、自分の中で時間が止まったままでいる〔気がする〕。自分の心の歩みのわけを、五十年経つて最近やわと実感するよりに変わった。それに気づくのに、おれには五十年〔心の歩が〕必要だった。」

そち話しながら〔そう話し〕、思わず〔目から〕こぼれたしずくを友人は不思議そうに眺めていたが、私は自分でも奇妙な感動と感慨にふけていた。

孤独な人のいのちに自然と目がゆき、寄り添うことが自分の活動になつてゆく〔いった〕。心の渇きがそうさ

せあ「た」。あなたが導いてそうさせあ「た」。

「私は」あなたの笑顔が大好きだった。あなたとの短い生活の記憶が私にすり込まれていて、五十年経っても「私の」心の中でそれが息づいている。同時に、人生の苦境の途上で、何度あなたにあたり恨んだとか「を恨みあたりちらしたことか」。なぜ私たちを捨てて先に逝ったかと。

でも、目を閉じるといつも笑顔のあなたに会える。あなたはいつも守ってくれた。そして導いてくれた。ありがとう。私は、天国に宝を※積んでゆきたい。「ゆき、」五十年間ずっとあなたの笑顔を追いかけてきた「求めている」。それは、……それは、あなた「の笑顔」に会いたくて。

※積む。あなたの笑顔に会いたくて。